

高山の文化を高めた人々

36

日・米・中国大陸で
看護に尽した牧田きせ

池之端甚衛



進歩的な家族に囲まれて利発な少女に育ったきせは、丹生川尋常小学校高等科を二番で卒業し、高山の補習女学校へ進んだあと、看護婦への道を志し、明治三十九年（一九〇六）十六歳のとき、岐阜看護婦養成所へ入りました。

岐阜県で最初にナイチンゲール記念章を受賞した牧田きせは、明治二十三年（一八九〇）二月二日、高山市丹生川町新張の父・牧田源兵衛、母・その枝の八人兄妹の次女として生まれました。

牧田家は、進取の氣に富んだこの地方きつての篤農家として知られ、祖父の源定は、明治三十三年（一九〇〇）上京した折に乳牛六頭を購入して帰り、飛騨の酪農事業の草分け（牧成舎牛乳の創始）になった人で、父の源兵衛も、いち早く電気事業の重要性に着目し、小八賀川沿いの所有地を発電所の敷地として無償提供し、明治三十六年（一九〇三）、三川発電所（元・中電下切発電所）が竣工するきっかけをつくった人でした。

きせが看護婦への意志を固めたきっかけは、日露戦争で多くの犠牲者（丹生川村の戦死者四〇人）を出し、遺族の慰問で高山を訪れた乃木希典大将の講演を聞いて感動を受けた母の影響で「お国のために女性で役立てられるのは、看護婦の道」と誓った為と伝えられています。

二年間の看護婦養成所を卒業したきせは、東京の日本赤十字看護学校へ進み、明治四十年（一九〇七）、看護婦として日赤中央病院

に採用され、中耳炎で入院した学習院々長・乃木陸軍大将や、急性じん炎で入院した日露戦争当時の参謀総長で後の首相・山県有朋の看護にあたり、山県からは感謝の色紙をもらいました。

きせの妻は、これ以後の活躍に示されました。

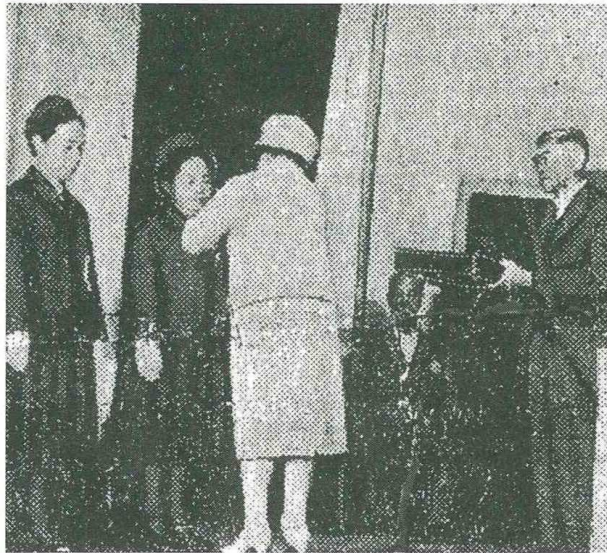
当時最も進んだアメリカの公衆衛生学や看護婦養成制度を学ぼうと、英会話の塾へ通い、大正四年（一九一五）ついに念願がかなって、日赤病院から米国・ロスアンゼルス市のクラッター病院へ派遣され、昭和九年（一九三四）に帰国するまでの十九年間、病院での看護や、在米邦人の援護活動などに尽力しました。

きせは、当時猛威をふるったスペイン風邪患者の看護に

寝食を忘れてあたり、医師会から感謝状を贈られたり、ロスアンゼルスオリンピックに出場した日本選手団の食事などの世話を親身になってつとめ、選手団から大いに感謝されたのはじめ、発明王エジソンや相対性理論のアインシュタイン博士とも親交を深めました。

帰国した後の昭和十二年（一九三六）からのきせは、悪化した日本と中国・米国の国際紛争に巻き込まれ、終戦までの八年間、日中戦争・太平洋戦争の従軍看護婦長として中国大陸や南方の激戦地を転戦しながら献身的に傷病兵の看護にあたりました。

終戦後は高山市内の自宅に落ち着き、高山高等看護学校の講師としてかねてからの念願であった看護婦の養成につとめ、二百五十人余りにのぼる看護婦を送り出すかたわら、全国で海外における看護経験を中心に講演して廻りました。そして、昭和四十年（一九六五）長年におよぶ国際的な看護活動が認められ、全国で四十四人目、岐阜県で初めてのナイチンゲール記念章の受賞者となり、明治・大正・昭和を看護一筋に生きたきせは、昭和四十六年（一九七二）、八十一歳の生涯を終えました。



ナイチンゲール章を皇后陛下から受ける牧田きせ